

山と博物館

第28巻 第6号

1983年6月25日

大町山岳博物館



奥田郁太郎 画

夏山を迎える

五月の下旬頃より各地の山開きが報道されると夏山の季節がきたと感ずる。

六月十二日に後立山連峯の山開きとも言われる恒太郎祭が恒例によって針ノ木岳の雪渓で行われた。今年は五月中旬から雨の降らない日が続いたため、雪渓は硬い、融雪は遅いようであった。例年顔なじみの人、新しい人と総勢二百人程であったが、青年層が年と共に少なくなり、高年令の人とファミリーが年々増加して行くように思う。

これは夏山にも言えることである。若者の姿が以前より少なく、小中学校の集団登山や、高年令のグループ登山が多くなった。

生活様式の都市化は、夏は涼しく、冬は暖い所で生活でき、欲しい物は季節に関係なく口にすることができ、行きたい所へは、歩かずに行け、何も汗水流して、重い荷物を担いで苦勞しなくても、一歩も歩かず車で山頂に立て、登山の気分を十分に味える。

こんな生活の科学化が、若者を自然から遠ざけたのかも知れない。

ところで登山も多様化し、高度の技術を必要とする岩壁や氷壁の登攀から、沢登り、縦走、トレッキング、ハイキングと多岐にわたるが、人それぞれの主張によってその山登りをする。そこには、自然との語らいがあり、又自ら自然との対決があつて、それが一つの心の糧になつていのではないかと思う。

梅雨時の晴れ間、雲の切れ間に見える山々を見て、夏になったらあの尾根を登ろう、あの岩尾根はどうだろう、と夏山に対する希望に胸をふくらませた若い時の記憶がある。

かつてのように思う存分歩くことはできなくても、自分の要求に合った、その時、その時の心への収穫の多い夏山としたいものである。

(山岳博物館協議会委員 長沢修介)

孤高の画家

奥田郁太郎先生

石沢 清

「人はその一生で、どういう人にもめぐり会えるかによって決まる」と、言うが意味の深いことばだと思ふ。

私は、終戦後、二十二年四月に北アルプス山麓の寒冷のへき村、白馬の中学で、先生が足りなくて、にわか美術教師になったが、毎日の授業に困りぬいて、この村の廃屋に独り住んで描く、奥田郁太郎先生を訪ねた。これが大きなめぐり会いになった。

その日、古いガタ戸を押し開けて入り、暗い暗い一間きりの炉の細い炎をはさんではじめて先生と相対した。

やせ細った、風さいのあがらない、栄養不足そのもので、目だけ私を射るのだった。

鍋がわりの空缶で、わずかな米と草の葉のようなものがかゆに煮られていた。

細くなる炎に、松ぼっくりをくべ足しながら、話して下さるのだが、余りの生活に暗い暗い部屋隅に、アカ染みたボロ布団と毛



奥田郁太郎氏 相田昭 撮影

布のようなものが二つ折りにしてあるだけで、家具も、荷物もなく、もうひとつの壁ぎわに、絵具箱とキャンパスが五、六枚あり、六号と四号ほどの二枚の絵が正面を向いていた。「雪景」と「花」だった。

そのころ、ズブの素人で、絵の何たるかも、皆目知らぬ私だったのに、この二枚の絵がやたら胸に突きささってきた。そして、胸奥底から、ドキドキと高鳴ってくる音脈に悩まされ続けた。かつて経験のない不思議なことだった。

そのころ、古い山案内人で、俳人でもあった、「勝つあん」という老人と、村道で会った。やにわに私の腕をとって、田の畦に座らせ、「お前さん、このころ奥田先生の所へ出入りして、絵を習っているようだが、いい先生に

ついたらもんだ」。先生はねえ。

一水会で一番若い委員(審査員)で、安井曾太郎という日本一の画家の直弟子で、一燈賞とか、昭和洋画奨励賞をもらい、日

展やら、日本国際美術展、日本現代美術展に招待されてるんだ、人間がほんとうに立派だ、

「しっかりやんなせえ。」

前歯の欠けた、ポロハンテンの老人が、どうして、こんなことを知っているのか、仙人からの告げの気持だった。

いくら、戦後の物資不足時代と言っても、奥田先生



の生活はひどいもので、清貧などを通りこして、生きていける極限の衣食住の中で、ひたすら描いておられたのであった。

古老、勝つあんは、折りにふれて、米、味噌を運ぶのだが、かたくなに否むというところも、つけ加えていた。

この厳しい生活態度は、三十余年後の今日でも、ほとんど変わっていない。

四十年前、まだ三十になったころ、巨匠、安井曾太郎先生の膝下の逸材と言われた、注目の新人が、何故、日本のチベットなどと言われていた、寒冷の辺地に来て、四十年後の今日まで住みつくようになったのか、以来、

身近にいて指導していただいても、もしかかと判らない。

当時、ある財団から高額の、作品が買上げられ、その金をもって信州に入り、仁科三湖辺でしばらく描き、現在の白馬村に至り、ここで十余年描いている。

戦後、最も充実した、作画は、この地を主題にしたものが多く、人物画も私たちが紹介した村人たちを描いている。

「奥田郁太郎の絵には、素材な農民の詩がある(福島繁太郎)」「奥田郁太郎こそ真の画家(安井曾太郎)」、今泉篤男氏なども激賞の評を新聞の芸術欄に載せていた。

私たちは、新聞や、美術雑誌などで見つつ、いよいよ、大変な人なんだと認識を深めていった。

巨匠、安井曾太郎の率いる一水会の力は絶大なもので、その中を三十才こそその若さで委員(審査員)ということは大変なことだったはずだし、絵を金にすることも出来たはずなのに、先生は、栄養不足で体力も弱り、画用具を二度に分けて写生地の川原まで運んでいたという話まで出る始末だった。

白馬の冬は、本当に厳しい。その寒冷と吹雪は、北辺の地に比すべきものである。その零下二十度近い日も、晴れていれば先生は雪の野に座してじっと描いておられた。

三号、四号の小品を描くためにも、毎日、同じ時刻に出向き、炭俵の座布団を雪に敷いて、手と、顔を凍らせて描くのである。

この小品に数週間、費すこともめづらしいことではなかった。冬の絵が、雪が消えて、夏になって、秋風のころになって仕上ること



すらすらしくないのである。
窓辺に置いて描き始めた、果物が変色し、
添えた花も枯れ、果物は腐り、とけて流れ出
しそれが乾いて、黒いひとつのミイラになっ
てようやく仕上るのである、花は完全なドラ
イフラワーである。

先生の追いつめられていく生活に、手を差
しのべた人たちがいたのだが、その厳然とし
た生き方には、手の出しようもなかったと言
ってよい。しかし、村人の先生への尊敬は日
毎に深まり、誰もが心から「先生」と呼んだ
し、子供たちのなつき方は大変なものだった。
まさに「今、良寛」だった。

会場でしみじみと見た。ほんとうに立派だっ
た。
めつたに上京しない先生も、草履ばきで上
京した。
しばらくして、私は中村琢二先生(芸術院
会員)から手紙をもらった。
「絵かきが、同じ絵かきの絵をほしいとい
うことは、余程のことだと思ってくれ、奥田
君にあの作品を譲ってほしいと言ってくれ」
早速、先生を訪ねて話すと、
「琢二先生がね」で、さして長い話にな
らず、先生に進呈することになった。
鎌倉の中村宅では、私を前にして、
「なんとか、お金を受け取らせてくれ」
だったが、私も奥田先生の性格を知ってい
るので、お断りして辞した。
その後、先生も困り抜いて、画材などを送
られたようだが、確なことは、私は知らない。
昨年、上野駅の公園口で、中村先生に呼び
止められた。

「おいおい、奥田君の例の絵だがない。本
当に大切なんだが、八十才の老人が持ってい
て、門外不出にしているのは、どうしても、
奥田君と、あの作品に悪い。もつと人の目に
映る場所に出したい。奥田君が愛し続けている
、白馬村へ贈りたいが、交渉をたのむ」
横沢白馬村長は親しい人だし、大の奥田ファ
ンでもあり、受け取ってもらい。再度、作品
は生れた村へ帰った。G嬢は速く青森に嫁し
ているが、
いま、しみじみ、鑑るに、確かに一代の力
作だと思ふ。

奥田先生は、なかなか絵が仕上ら
ない、私などの目には完全に出来上
っていると思うのに、夜を徹して描
きつぐ、期限のない作ならいいが、
展覧会の時には厳しい、私がメー切日
までギリギリ待つて作品を持って、
一、二度夜行で上京したことがある。
一度は一水会場で飾付けのための
配列が済んだところへ持参したが、
持参の旨を告げると、私の回りに会
の上の方々が集って来られ、一同が
見守る中で、荷が解かれて、額縁が借
りられ、絵が壁の中心に組み入れら
れるのを見ていて、いままさらなが、
先生への一水会の方々の心の配りを
知ったことだった。

愚直者の悲しさ、先生の言われる
絵への評価が、なかなかつかめない
ため、子供の絵の指導でも困り抜い
た。
根本になる絵の良さが把握できな
い限り、指導もできないからである。
先生の推めもあり、学校の長期休
みは全国の有名な美術校や、指導者
を求めて歩き回った。このことが、
私に美術指導のあり方を確立させる



ことにつながり、白馬の子供の絵が全国的位
置に上り、海外児童展でも、グランプリを得、
画聖ピカソが白馬の子供の絵を手にして激賞
したと外電が伝えてくれるまでになったので
ある。こんなとき、私の奥田先生は、誰より
も静かに喜んで祝ってくれたのである。
先生の母上からお手紙をいただき、先生の
伯父で、高名な画家、近藤浩一路先生宅へお
伺いした。母上は戦後、近藤宅のはなれにお
られた。
東京時代に描かれた、いわゆる出世作など
の力作を巻いて背負って満員列車で帰ったこ



とがあった。

しばらくして、先生宅を訪ねたら、部屋の古畳の穴ふさぎに、キャンパスを裏返しに貼ってあり、窓ガラスの破損ヶ所にも張ってあるではないか、まったく、驚いてしまった。先生が、中座したとき、釘を抜いてみるのもう、かなり絵具がはく落していた。

「過去はすてて、前進しつづけると言うことなのだろうか」

「石沢さんの手元に置いてもいいんですけど、母上のごとくに従っておけばあれらの作品は今日残ったのにと、このごろ、やたら残念になり、立派な母上とあわせて夢にまでみる。」

私も絵をはじめていたが、半歩の進歩で、淋しかった。一生に一度は一水会に入選したいと思っていたが、先生が一水会を辞して野に下るまで、出品するだけの技量にいたらなかった。

先生の推めで、在職のまま、芸大へ内地留学するようになり、武蔵野美術にも転入のような形が入った。ここで、ようやく絵が判りはじめて、一水会に出品し会員にもなれ後に日展にも出すようになったが、この先生との出会いがあったの今日だと、思っている。

奥田郁太郎展を本格的にやりたいたという希望は、つねに各所であったが、先生が望まないこと、手近にある作品で小さくやる方法しかなかった。

高橋大町市長、大町山岳博物館でも、かねてからの夢で、私も何度か相談をうけていた。ねばりにねばって、とうとう許可をいただいた。

本当にうれしいことで、精いっぱいがんばって、よい展覧会にしなければと、関係の方々と話し合っている。それにしても、大町市と山岳博物館が主催し、予算まで計上していただいたことはうれしいことであった。

昨年、相田というカメラマンが、奥田先生に密着して、その生活を撮っていたと、奥田フアンの穂刈さんから聞いた。よほど、気が合ったのだろう、生活写真など、めつたに撮らせない先生だから。しばらくして、その相田氏が、小生宅へもやって来た、その奥田傾倒もかなり

のもので、ひと昔前の、東京時代の先輩、同僚画家、美術評論家からはじまって、信州でも木曾路の徳山宅から、松本の穂刈氏、白馬の津滝、藤森宅までも足を伸ばしていた。私宅では、この二十年ほどに内密で書いた、奥田先生にかかわる、文などを、ことごとくあさって行った。

最大の美術誌「アトリエ」が八三年一月号に孤高の画家「奥田郁太郎」として、生活写真と絵と、中村琢二先生(芸術院会員、一水会運営委員)のすばらしい紹介文と組んで五頁にわたるものを載せて、私達をびっくりさせた。それだけでも、大きな驚きだったのに、二月号でも、五頁を費して続けて紹介した。今度は美術評論家で著名な今泉篤男先生の激賞する文だった。そして、三月号でも同じく



五頁を費して紹介したのである。異例のことである。相田氏の力だと後で聞いた。巻頭の文を紹介すると「ここに紹介するのは一人の画家の生きざまである。世俗をすて、山郷の小屋に住むひと間ですべてのその住居には、生きていくための必要最小限の生活用品と、しかし、画業をつらぬくには最高の空気が満ちている。画仙という呼称があるならば、それはこの人のためにあるといえるだろう。」

芸大名譽教授である、高田正二郎先生からお手紙を頂いた。小学校の時、奥田先生と同級生だったという。そして、そのクラスに、日本書道界の雄、青山彬雨先生もごいっしょだったというのである。同級会をやりたいと結んでおられた。今泉先生からは「奥田展、私もうれしく感謝します。奥田先生にくれぐれもよろしく」と結んでおられた。

(二水会々員、日本水彩画会評議員、日展所屬) (当誌上のデッサンは、奥田郁太郎氏画)

博物館だより

企画展 奥田郁太郎展

東京時代、白馬時代、松本時代の作品60余点が展示されます。このように多数の力作が展示されるのは今回が初めてのことであります。

▼期日 7月23日～8月21日

▼会場 大町山岳博物館特別展示室外

▼企画展中は全期間無休 ▼平常料金

山と博物館 第28巻 第6号

発行所 長野県大町市 TEL.0261-2111

印刷所 大町山岳博物館

印刷所 長野県大町市 大森タイムス印刷部

定価 年額1,200円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号 長野四一三三三三